少年の目

黒薮次男作　吉崎正巳絵

少年の日

長谷川巳次男作
吉崎正巳絵

江苏工业学院图书馆
藏书章

913　黒薮次男
少年の目
新日本出版社　1991
165 p　22 cm（新日本少年少女の文学II・15）

黒薮次男（くろやぶつぎお）

1922年岡山県に生まれる。元小学校教師。日本民主主義文学同盟員。日本作文の会会員。著書「どの子にも表現する力を」「ぼくこんなにかしこくなった」（民衆社）、「親と教師のための教育学」（青木書店）、「おとなと子どものいい関係」（草土文化）、その他。

吉崎正巳（よしざきまさみ）

1914年、山口県光市に生まれる。第一美術協会、日本児童出版美術家連盟所属。絵本に、「こぐまのぼうけん」（ポプラ社）、「ざりがに」（福音館書店）、「あかてがにのたび」（童心社）、さし絵に「八月の少女たち」（新日本出版社）などの作品がある。

新日本少年少女の文学II・15　少年の目

1991年4月15日　第1刷発行©

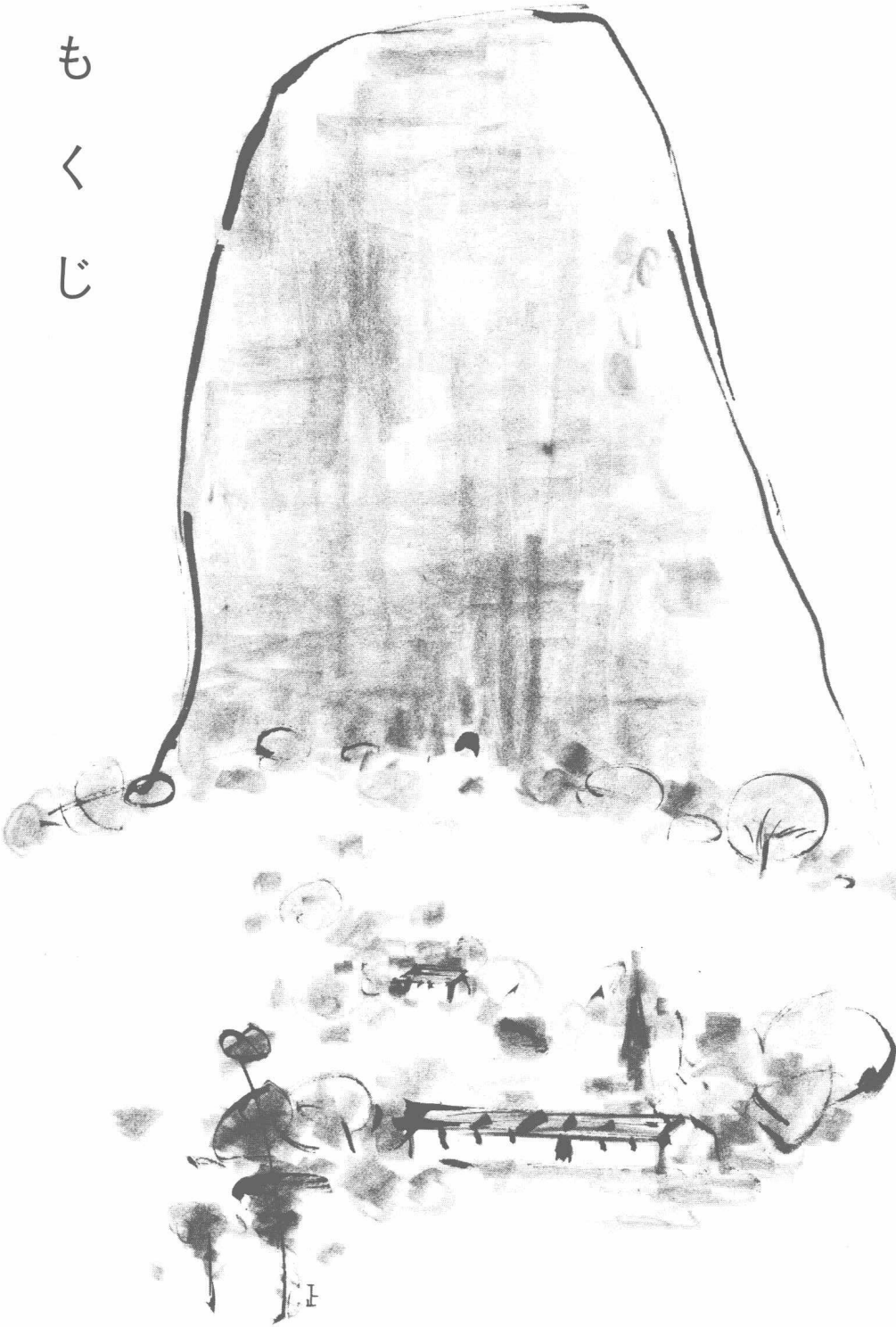
著者　黒薮次男
画家　吉崎正巳
発行者　山本功

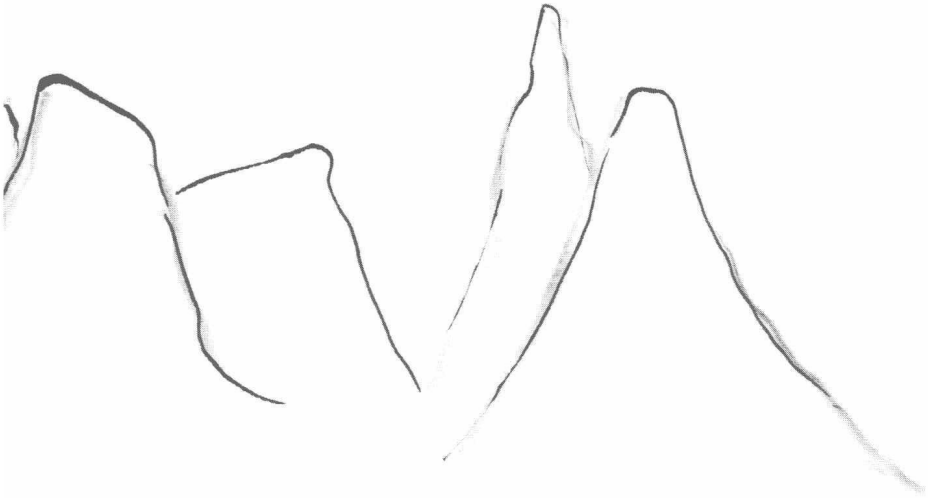
郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ヶ谷 4-25-6
発行所　株式会社 新日本出版社
電話 営業 東京(3423)8402 編集 東京(3423)9323
振替　東京 3 — 13681
印刷・壮光舎印刷　製本・小高製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
この本の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律に認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。あらかじめ小社に承諾をお求めください。

ISBN4-406-01956-1 C8393　Printed in Japan

もくじ





プロローグ――一枚のはがき……5

1 たいしたえもの……16

2 少年と牛……23

3 夜行性動物のように……38

4 みにくい争い……47

5 子牛を追って……56

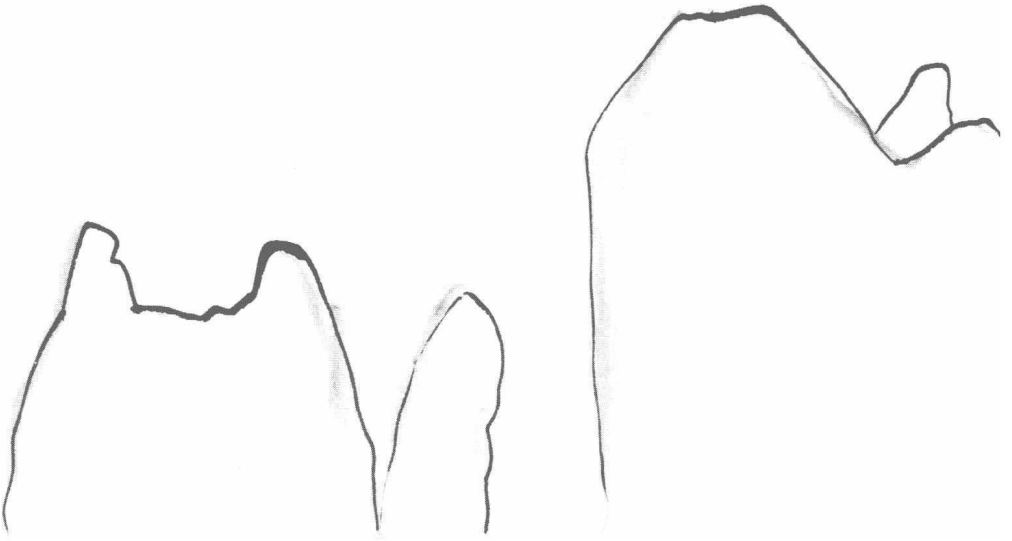
6 兵隊の死と子牛……65

7 少年の話――父が死んだ日……73

8 少年の話――子牛が生まれた日……83

9 ひとときの平和……89

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



10 子牛といっしょに洞くつへ……95

11 洞くつ探険……104

12 親牛との別れ……110

13 魚とり……121

14 子牛があぶない……131

15 岩塩……137

16 子牛の運命……144

エピローグ——祖父の肩……161

あとがき……164

装丁・さし絵　吉崎正巳

プロローグ――一枚のはがき

雨にぬれた赤いポストが、外灯の光をうけてひかっている。

良平はポストの前に立って、左手にかさをもちかえ、右ポケットから一枚のはがきをとり出した。

良平ははがきをポストの口にいれかけて、手をひっこめ、よわい光に文面をかざしてみた。文字はよみとれないが、そこにはふとい文字で、ただ「不参加」とだけかかれているはずだ。

良平は、はがきを未練がましく右手にかざして頭をふった。が、おもいきってポストの口にいれ、指先ではたいて落としこんだ。

右手にもちなおしたかさに、雨つぶが小さくはじけた。

一枚の往復はがきが、一か月あまりも前から祖父の部屋の机のすみにおかれていた。

祖父の戦友会の案内状だった。

太平洋戦争中、祖父は中国大陸で中国軍とたたかった。

戦友会はそのころ、祖父といっしょに中国のあちこちを、中国軍とたたかいながら、うろつきまわった人びとのあつまりだった。

戦後四十年あまりたって、この人たちは六十代、七十代をむかえ、むかしがなつかしい年齢になった。そんなことから、あつまってあのころをしのび、おたがいの健康をよろこびあおう、というのがこの戦友会だった。

ことしとどいた案内状には、桂林、広州方面の中国旅行を秋におこなうから、ぜひ参加してほしいとしるされていた。

もちろん、祖父はこの中国旅行によろこんで参加するだろうと、良平はこのはがきを祖父の机の上でみたとき、はや旅行みやげをたのしみにしていた。

しかし、何日たってもはがきは祖父の机の上におかれたままだった。

はがきがきて二週間ほどすぎた夕食のとき、良平はおもいきって祖父にたずねた。

「おじいちゃん、中国にいくんでしょう」

「うん……」

祖父はあいまいにくちごもり、いくとも、いかないともはっきりしない。

「おじいちゃん、中国語はなせるんでしょう」

「うん、むかしはな……。いまはどうかな」

と、これもいつもの祖父らしくない、自信のないくちぶりだ。

祖父は高校の英語教師だったが、いまは退職して、K市にある女子短大の講師をしている。英語

はもちろん、フランス語、中国語もすこしははなせる、といつか良平にいっていた。
「家のことなら心配ないよ。桂林といえばうつくしいところだそうだし、心配しなくてもサツキの水ぐらいはやるよ……。なあ良平」
父は祖父に中国旅行をすすめながら、良平にサツキの水やりの責任をもたせるらしい。サツキは祖父がたいせつにしている盆栽なのだ。
「お母さんもつれていってあげてくださいよ」
と、母もいうし、祖母も、
「桂林って、どんなところかしら……。たのしみにしていますよ」
と、みんなが祖父の中国旅行をすすめたけれど、祖父は、
「まあ、なあ……」
と、はっきりしない。
祖父は旅行がきらいなのではない。退職してから、祖母といっしょにアメリカ、ヨーロッパと二回の海外旅行をたのしんだくらいだ。
良平は、いままで、こんなにえきらない祖父をみたことがない。なにごとでも、てきぱきとかたづける。どちらかといえば気がみじかく、自分の考えをはっきりさせる方である。
祖父と反対にのんびりかまえる父を、祖父はまどろっこしくおもうらしく、男はさっと決断して、

実行するものだ、などとにくまれぐちをたたくときがある。
父はこんな祖父を、がんこじいさんなどと、かげでわらっている。
しかし、どうしたことか、こんどの旅行については祖父らしくない。はがきはいつまでも、机のすみにおかれたままだった。
返事のしめきり日まで、あと三日という日の夕方、良平が学校から帰ると、祖母が、
「おじいちゃんがよんでるよ」
と、良平をよびにきた。
「なんの用事？」
「知らないよ。いってみて」
祖母はいい残して、立ち去った。
良平が祖父の部屋へいくと、祖父は障子をあけて、暮れかけた庭をみていた。
「おじいちゃん、何？」
「おう……」
と、祖父はふりむいて、
「そこにあるはがき、いますぐに、ポストにいれてきてくれんか。雨がふりだしたんで、出かけるのがおっくうになった。あしたでもいいんだが、手もとにおいとくのがどうも気になる」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

と、机の上を指さした。

そこにあるはがきが、じゃまだといわんばかりである。

良平ははがきを手にとった。あの往復はがきの返信だ。そこにはまるでおこったような、いかつい文字で「不参加」とだけしるされていた。

良平は、期待をひどく裏切られたような気がして祖父をみた。

祖父は良平に背をむけて、腕をくみ、庭に目をむけている。

良平は投函する前に、祖父はほんとうに中国へいかないのか、たしかめたいおもいがした。

良平は、はがきを手にして祖父の横に立った。

庭の木木は雨にあらわれている。

庭はもううすぐらく、ひくい木は、黒い布をかぶったようにこんもりうずくまり、たかい木は、背のびしたかかしが、やみの中にとけこもうとしているようにみえた。

塀よりのタイサンボクの花だけが、暮れのこる庭にひときわたかく、ほの白い花のかたちをようやくたもって、うすやみにうきでている。

祖父の目はその花にとまっている。花がやみにとけこむ瞬間を自分の目でとらえようとしているかのようだ。

良平は、声をかけるのがためらわれて、はがきを手にしてそっと部屋を出た。

良平は祖父の部屋の戸をそっとあけた。祖父は、机の上にぶあつい本をひらいて見いっていた。
「おじいちゃん、はがきいれてきたよ」
「おう、すまなかったな」
祖父はいつもの笑顔にもどっていた。机の上にひろげてあるのは、百科辞典の世界地図のようだ。
良平は腰をかがめてのぞきこんだ。中国の地図だ。
「おじいちゃん、中国へはいかないんだね。ぼく、おじいちゃんはきっといくだろうとおもっていたんだけど……」
「うん、いかない」
祖父はふきげんに顔をしかめた。
祖父は良平には、めったにこういう顔はしない。何かのことで気もちをそこね、祖母や父母にはひたいにしわをよせることはあっても、良平にはそういうことはしない。
きょうのような祖父はめずらしい。
「これ、中国の地図でしょう」
良平はきいた。
「そうだ……」

「おじいちゃん、中国のどのあたりで戦争したの？」
「ううん……。このあたりだ。このあたりをうろうろしていたんだ」
祖父は、机の上にひろげてある中国南部の地図の中の街を指で示した。良平は机に両手をついて、そこに顔を近づけた。
「ここ……。ケイリン」
「そう、桂林……。あちこちうろついたが、ここにいちばんながくとどまっていた」
「ぼく、どこかでこの街の名前きいたような気がするな」
「テレビか新聞でみたんだろう。ここはいま、観光地として有名らしいから」
「うつくしい街？」
「さあ……。あのころは荒れはてていたなあ……。いまはどうなっているかな」
「おじいちゃん、なつかしい？」
「ああ、なつかしいなあ」
「そんなら、どうしていかないの？」
祖父は、むっと口をつぐんだ。
やっぱりきょうはきげんがわるい——。
と、良平が立ち去ろうとしたとき、

「まあそこにすわれ」
と、祖父が手をあげて良平をとめた。
「おじいちゃんはな、中国がなつかしくてもいかないんだ」
良平が、祖父にむかいあってすわるのをまって、祖父はいった。
「どうして……。中国はきらいなの？」
「いいや、きらいではない。すきだ」
良平は、
わからない――。
と、首をかしげた。
「このはがきの、ここをよんでみろ」
祖父は戦友会の案内状を机の上にひろげ、文面の一部に、赤いマジックペンで線をひきながらいった。
そこには、つぎの文がしるされていた。
『……戦争中わたしたちは、中国の人たちに非人道的行為をかさねました。このたびの旅行は、たんなる観光旅行ではなく、わたしたちのおかしたあやまちの謝罪をこめた旅行としたいとおもいます……』

良平は、ここのところを三回よんだ。

しかし、祖父が、この文のどこにひっかかるのかわからない。

中国の人びとにわるい行いをしたのなら、あやまるのはあたりまえではないか。

「よんだかい……。謝罪の旅とはどういうことだ」

祖父は老眼鏡をはずして良平をにらんだ。良平は、いま頭にうかんだ、あやまるのはあたりまえではないか、という考えを祖父に見やぶられ、しかられた、とおもって首をすくめた。

「謝罪の旅というときこえはいいが、中国の人びとを苦しめたわたしたちの行いは、そんなかんたんなことですまされるようなものではない……。なんとも、謝罪の旅とは日本人の身勝手ないいぐさだ」

祖父はひたいのしわをいっそうふかくして、つよい口調でいった。

良平は、ますます首をすくめた。

「いやいや……。良平におこってもしかたないわな」

祖父も、ようやく自分がひどく興奮していることに気づいて、てれくさそうに頭に手をやってわらった。

「良平……。おじいちゃんはな、中国へいってみたくてもいけないんだ。観光だ、謝罪の旅だ、などといって、自分たちがおかした罪のあとをもういちどたどってみる……。そんな気にはとてもなれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com